

教科担任部会 研究の成果と課題

1 児童一人一人を多面的にとらえ、よさや可能性を引き出すことに関して

教科担任制の実施に際して、学級担任が教科指導において当該学級を担当する時数が減少することから、当初は学級担任と児童との結びつきが希薄になるのではないかと、という懸念があった。

学級担任と子どもたちとの結びつきの強さは、単に接する時数の多寡によるものではなく、児童理解の深さによってもたらされると考えられる。常に学年担任という意識をもちながら児童の指導にあたり、複数の目と心で、多面的な視点から児童をとらえるために、児童理解のための情報交換を密にしてきた。その結果、教師には「学年の児童」、そして児童には「学年の先生」という意識が定着し、教科担任の指導者を含めて、学年全体の教科指導を円滑に行うことができた。

児童にとって、学級担任が気づいていないよい面を複数の教師に見つけてもらうことは、児童自身の可能性の発見につながり自信をもたせるきっかけになる。また、学級担任にとっては、他の教師からの指摘が、児童理解を深めることにもつながる。

児童にとって安心して学習できる環境を保証し、好ましい学習習慣を身につけさせるためにも、そして、児童のよさを多面的にとらえ指導するためにも、今後さらに児童理解の観点を精査し、担当者間の情報交換を密にする必要がある。

2 教師の得意分野を生かした授業を行い、児童の学習意欲を喚起し持続させることに関して

学年の進行と共に授業の理解度が低下し、学校生活への満足感を得にくくなっている児童の増加傾向が問題になっている。学習を通して新しい知識を獲得し、「分かった、できた」という喜びがあって初めて「関心・意欲」が生まれ、強化される。基礎的・基本的な知識の習得・定着のないところに学習意欲は生じない。

教科担任制により、教師にとっては得意分野の教科に絞って教材研究ができるため、教材研究や準備の時間に余裕が生まれた結果、従来にも増して児童の知的欲求に応える指導がしやすくなり、児童の学習意欲の向上につながることを期待できる。

これまでの実践を通して、教科担任制では教科ごとに担当者が替わることにより、児童は気持ちを切り替えて適度な緊張感を保ちながら学習していることが分かった。

また、教科担任制導入後、6学年児童を対象に行った「意識調査」の結果、「楽しい授業が増えた」「好きな教科ができた」という回答から、教科担任制により学習意欲が向上する効果が現れてきていると考えられる。

しかし、進んで学習したり、積極的に発表したりすることに関しては未だに満足できる状況になく、今後改善していきたいと考える

3 教師の指導力のスキルアップに関して

教科担任制の中学校教師と異なり、学級担任制の小学校教師は一つの単元を複数の学級で複数回指導することを経験するのは希である。十分な教材研究の結果授業に臨んでも、授業後に幾多の反省が生じるのは誰しも経験することである。

本校における教科担任制の主な効果として、以下の点が挙げられる。

- ・一つの単元で同じ内容を繰り返し指導できることから教材研究が深まり、児童の反応に臨機応変に対応できる柔軟性や指導力を身につけられる。
- ・学級ごとの理解度や学習に対する姿勢の違いがより鮮明になることから、学級の実態に合わせた指導を工夫しながら評価規準を意識した指導をすることができる。
- ・他の学級の児童にも親近感を感じ、より広い視野で指導することができるようになる。

今後、教科担任制ならではのよさを生かし、児童の指導に還元できる評価のあり方についても教師のスキルアップを図ってきたいと考える。

4 中学校へのスムーズな移行に関して

中学校進学に際して、6学年の多くの児童は教科担任による複数の教師の指導に対応できるか不安を抱えている。本校の教科担任制は、副次的に中学校入学後に適応を容易にする効果もねらいの一つとしているが、中学1年生に対する追跡調査の結果を見ると、小学校で教科担任制の授業の経験がある生徒の方が未経験の生徒よりも中学校の教科担任制に適応しやすいことが分かった。

このことから、中学校における授業の難しさ等、入学当初中学校生活に少なからず不安を抱えている生徒にとって、小学校時代に担任以外の教師と数多くふれ合う教科担任による学習を経験することは、不安を軽減させ、中学校生活にスムーズに移行させるうえで有効であることが分かった。

6学年保護者の意識調査からもわかるように、児童の学習意欲の向上は、教師だけではなく保護者の願いでもある。その共通の願いを実現して中学校に送り出せるように、今後も教科担任制の利点を生かしながら研究主題に近づくための実践を続けていきたい。